夢野久作宛川田功書簡　翻刻と解題

――川田功書簡から見た『ドグラ・マグラ』執筆初期段階の構成

大鷹涼子

作家「夢野久作」は、大正十五年、杉山泰道が博文館の懸賞小説に当選したことによって誕生した。そしてこの年は『ドグラ・マグラ』に関する記述が、現存する久作の日記に初めて記された年でもある。『ドグラ・マグラ』が松柏館書店より書き下ろし単行本として刊行されたのは昭和十年、その翌年の三月に久作は急逝するので、彼が「夢野久作」であった期間と『ドグラ・マグラ』を執筆改稿し、この小説を世に出すため編集者や出版社と折衝した期間とは、ほぼ重なる。この畢生の大作とも言うべき『ドグラ・マグラ』は如何なる過程を経て執筆されたのか。その過程はこれまで久作の日記[1]によって探られてきた。まずは当選報を得た日の記事を見ることから始めたいと思う。

「博文館森下岩太郎氏より「アヤカシの鼓」二等に当選せりとて手紙来るを、クラ喜びて持ち来る」。大正十五年五月八日の日記にはこう記されている。「森下岩太郎」とは作家、森下雨村の本名で、彼は当時博文館から発行されていた雑誌『新青年』の編集長を務めていた。[2]杉山泰道は、大正十五年以前も本名や他の筆名を使い、勤務先の『九州日報』や父、杉山茂丸が主催していた台華社の機関紙『黒白』などで文筆活動を行ってはいたが、この当選が中央の雑誌に執筆する契機となったのである。[3]

さて、当選報直後の十日には森下に「所感と手紙と写真」を送る準備をしており、その翌日の五月十一日、突如「終日、精神生理学の原稿を書く」という一文が見られる。大正二年から大正十二年、及び大正十三年の三月以降、大正十四年の日記が現存しないため、これ以前に関連する記述があったかどうか確認することはできないのだが、現存する日記の中ではこの記述が、『ドグラ・マグラ』執筆に関する最初のものである。[4]なお『ドグラ・マグラ』という題名がつけられたのは昭和五年[5]のことであり、それまでは「狂人の解放治療」という題名であった。この「精神生理学の原稿」も「狂人の解放治療」に関連する原稿と思われ、以降、連日「狂人の解放治療」、略して「狂人」を執筆し続けている。

そして日記における最初の記述から約三ヶ月後、八月二十一日付の

日記には「狂人の解放治療遂に書き上げる千百余枚。徳蔵君[6]小包を包んでくれて、東京博文館森下岩太郎氏宛送る」と書かれている。日記の現存する大正十五年から昭和五年までの経過を見ると、明らかに「狂人」稿の執筆継続期と中断期が反復され、書き進められていることが分かるのだが、八月二十一日、第一回目に完成した原稿が森下のもとへ送られたわけである。これを松本常彦氏にならい、仮に「第一次草稿」としたいと思う[7]。ところで、森下雨村へ送られた「第一次草稿」の行方であるが、久作の死後「悼惜、辞なし」（『月刊探偵』昭和十一年五月）[8]において森下は次のように回想している。

僕が「新青年」編輯時代に千枚近い創作を受取り、当時、博文館の買ひため原稿の整理係りをやつてゐた川田功君に廻して読んでもらつて、送り返したことがある。当時川田君から読後感を聞いたやうにも思ふが、何しろ千枚といふ原稿で雑誌では問題にならず、上の空で聞き流して送り返してもらつたやうに記憶する。

久作の原稿は森下の手に渡ったものの、実際に目を通したのは川田功であり、この時、川田から久作に書簡が送られたのである。

川田功は、明治十五年一月四日に生まれ、昭和六年五月二十八日に歿した。『川田功追悼録』（編者、発行年月日不明）[9]所収の、森下雨村「博文館時代」によれば、川田が原稿調査係嘱託として博文館に入社したのは昭和三年十二月十七日のことである。一年その仕事をした後、子供雑誌『譚海』の嘱託となったが、昭和五年三月、『少女世界』に欠員が出たためそちらへ転じ、同誌主任として歿するまで勤めた。西原和海氏がちくま文庫版『夢野久作全集』第九巻（一九九二年四月）「解題」で指摘するように、大正十五年当時、川田が原稿調査係嘱託つまり「買ひため原稿の整理係り」を担当していたというのは森下の記憶違いであろう。川田は田中貢太郎と友人で、郷里が同じく土佐であり、森下は田中を介して川田と知り合ったのではなかったかと言う[10]。川田は田中の紹介を得て『軍する身』（止善堂、大正六年七月）という自叙伝も出版している。

川田は作家としても活動し、戦記や探偵小説を発表している。海軍少佐を勤めた経歴のためであろう、森下から依頼を受け、大正十三年一月から長編戦記物「砲弾を潜りて」を『新青年』に発表している。他にも同誌には「酩酊」（大正十五年一月）「偶然の一致」（同年三月）「ある朝」（同年五月）などが掲載された。川田単独の単行本はないが、『日本探偵小説全集』第十五巻（改造社、昭和五年）の「山下利三郎・川田功集」にその殆どの作品が収録されている。ちなみにこの『日本探偵小説全集』の第十一巻は「夢野久作集」である。

川田功が夢野久作に宛てた書簡の現存については、既に西原氏前掲「解題」において取り上げられているが、川田が久作の原稿に対して助言を行った事など、その要点が簡潔に提示されていたにすぎない。本稿では、福岡県立図書館杉山文庫所蔵川田書簡[11]、全五通の全文を翻刻し、合わせて川田の書簡が送られた当時の「狂人の解放治療」の状態について述べたいと思う。川田の書簡は『ドグラ・マグラ』執筆の初期段階に送られたものであり、書簡を分析することによって、久作

の執筆過程の一端が明らかになる。

現存する書簡には封筒などは付されておらず、正確な発信年月日は不明であるが、以下には、筆者が内容から判断し、古いものから順に並べて提示した。なお各書簡の冒頭に①～⑤の通し番号をふり、その下に書簡の枚数を記した。翻刻に際し、適宜句読点を補ったが、原書簡に付された句読点に関しては括弧に入れ、翻刻者が補った句読点と区別が付くようにした。

（翻刻　山本秀樹・大鷹涼子）

① **便箋四枚**

杉山泰道様　侍史　　川田功

未だ拝眉の栄を得ませんが「新青年」誌上で御尊名を承知致し、御才筆に啓服致して居る者で御座います。

処で先日一寸博文館編輯部へ立寄りました節、貴殿の長篇「狂人の解放治療」の原稿を示され『こんな長い物を贈つて来られたが（、）到底読む事は出来ない』と云ふ事でした。それで私は乞ふて拝読する事に致し、本日返しに参りました。

当然読後感を聞かれました。私は出来得れば採用されたいと話しましたが何と云つても餘りに長過ぎると云ふ事でした。私は然らば小生から今少しく短かくする様手帝を差上げて見ようかと申しました。処が連続掲載して人を惹付けるに足るものだらうかと云ふ問ひです（。）私は然りと答へたいとの山々ですが、多数の読者を対手の事であり私には編輯の経験も御座いませんので話の筋を話て見ました。併し筋丈けでは実は編輯者にも判り様道理がありません。「先づ一と先送り返そう」と云ふ事になりました。そこで私はこれが余り長いので他の雑誌にも中々掲載して呉れなかつたら余りに惜いと思ふのです。だから婆心を以て或は御気に触るかも知れませんが（、）今少し短かくされん事を御勧めし、今一度「新青年」編輯者に訴へて見たいと思ひますが御意見は如何で御座いましよう。

私が批評がましい事を申上ぐべき義理合ではありませんが、読者として卑見を述べて見ますると（、）作中の正木博士が外国で博士論文として書いたもの、中、直接此小説に関係の無いものをはぶくと余程枚数がへり且つ始めから人を惹付け得られはしまいかと思ひます。又会話の授受ですが「私」と云ふ人の答へが余り多過ぎ且つ先生に対して少し不遜の嫌ひがありはしまいかと思ひます。例へば『ハッハッ……』と云つた様な処が多過ぎはしまいかと思ひます。先生から学説などをきかされて居る時には今少しく冗談口を省くのが実際的であり、又此凄い小説に一層緊張味を加へはしまいかと思はれます。

今一ツの御願ひは『私』と云ふ人間がどんな人であつたかを説明願ひたい事です。正木博士の子であると云ふ丈けで他は少しも判らないのが物足りません（。）又少し後戻りしますが、終の方で余り博士に食つて掛り過ぎはしますまいか。食つて掛らずに自分独で困つて居ると後に親子と知れた時などの感じがい、様ですが、貴殿が斯くの如く書かれた気持は判りますが、矢張親子の状は何となく軟かく結付けられると云ふ風にした方が此学理的一方凄い一方の小説に一味の温暖を加

へて却てよくはないでしようか。甚だ出過ぎた感想を申上げて何とも相済みませんが、私は出したい熱心から申上げた許りです。どうぞ悪からず御聞捨てを願上ます。　　匆々

〈備考〉

書簡に発信年月日は書かれておらず、久作のもとへ何時届いたのか不明であるが、大正十五年十二月十九日の日記に「川田功氏へ、狂人の原稿の事」という記述があり、川田宛に書簡を書いたことが記されている。本書簡への返信かと思われる。

本書簡には、「狂人の解放治療」が、博文館の森下雨村の手に渡ってからの経緯について書かれており、先に引用した森下の言と合致している。書簡中に「「新青年」誌上で御尊名を承知致し」とあるのは、「夢野久作」としての第一作目「あやかしの鼓」及び「所感」が、大正十五年十月号の『新青年』に掲載されたことと照応する。

ところで、久作の日記によれば、大正十五年八月二十一日、森下雨村に「狂人」稿送付後、約四ヶ月間執筆を中断し、他の作品――例えば「一足お先に」「押絵の奇蹟」「空を飛ぶパラソル」などに取り掛かっていることが分かる。八月二十二日から十二月二十一日まで、全く「狂人」稿を書いた形跡が日記に見られないのは、原稿そのものが久作の手許になかったためであろう。本書簡と共に「狂人」原稿が返送され、前述の十二月十九日、川田に返事を書き、その直後、同月二十二日に「狂人」稿の執筆を再開している。翌昭和二年三月九日から四月七日までの約一ヶ月間、久作は東京に滞在しているが、その間も合間を縫って執筆している。日記を見ると大正十五年十二月二十二日の執筆再開から約四ヶ月間、原稿の「書き直し」や「再校」を行った形跡があり、「第一次草稿」がこの期間に再検討されたようである。そして「第二次草稿」と言えるものが完成し、再び川田に原稿を送ったことは、次に挙げる書簡からも証明される。

②　便箋十一枚（七～九枚目欠け）

拝啓「狂人解放治療」今半分迄読んで考へて居ります。

森下雨村に狂人解放治療は書き直す事に成つて居ると話をしました時森下曰く今迄原稿を書き直して好くなつた例がないと。

私はこれを聞ゐて多少失望して居りましたが併し貴下のは何と云つても題材がいゝから大丈夫よくなると思ひました。

処が私としては大に失望しました。前に悪くなつて居るとは思ひませんが、前と大した変りがないと思はれるのです。よくなつた所もあるし悪くなつた所もありますが（一）もつと根本から直さなくちやならないと思ひます。

前に一寸申上げました時、会話の受け渡しをもつとよくしたらと申上げた様に思つて居りますが、私は今半分の処で熟々考へました。

こんな不可思議と云ふか奇怪と云ふか兎に角普通人の想像を超越した出来事を記してあるのに（一）何故に人に迫つて来るものが無いのだらうか。

と（一）これはどうしても表現法が悪いに相違ないのです。

表現を巧みにすれば、必ず人を魅する力を持つて居るべき筈の材料なのです。所で私は此表現法が殆んど会話体で出来上つて居る事に気が付きました。小説は会話体で書くと一番拙劣なずるい方法だと云はれて居りますが、拙劣やずるいと云ふよりも私は深刻になり難いと思ふのです。どうしても談話体で書かなければ巧く行かないと云ふならば談話体でもいゝのですが（一）大切な点を会話体で書くのはどうしても深刻にならない様に思ひます（二）又之れを描写と説明と物語体とに改めると三分の二位で書き尽せる事なんです。

例へば正木博士と「私」とが、呉一郎と云ふ男を二階窓から見乍ら云つて居る所で

『（前略）髪毛を指に巻き付けたまんま（一）自分の室へ引込んでしまつた（二）それから今日まで一ヶ月の間といふもの一寸も自分の室を出なくなつたのだ（三）』

とあります。此出来事が既に悲哀の心を人々に呼起させる出来事であるのに、其次に「私」が

『何だか非常な悲劇らしいですね（一）此心理遺伝の原因は……』

と云つて居るので、一向悲劇でも何でもなくなつて了つて居ります。

それから其後に

『全く其通り……支那に起つた出来事だ（二）』

『アツ……彼の青年は支那人なんですか（三）』

『イヽヤ（一）先祖が支那人なんだ（二）』

『ヘエ（三）何といふ名前です』

『呉といふ一字姓だ（一）此地方に特に多い（二）大陸からの移住民の子孫なんだ（三）』

『名は何と云ひますか』

『一郎といふ』

『年はいくつですか』

『明治四十年の……エーと十一月生れだ云々』

『何だか西洋人見たやうじやないですか云々』

『エライ其通りだ（一）云々』

『　　』

『　　』

と云ふ風に会話が続いて居りますが、名から姓から年齢などを一々会話で問答した日には、どんな小説でも大がいいやになつて来はしますまいか。読者としてゞすよ。

それから『エライ其通りだ』などゝ云ふ言葉が、此深刻であるべき物語りを滑稽化して価値をわざ〳〵無くして居る様に思ひます。

何しろ一行で書ける事を数回或は十数回の会話にして見た所で

（この間、便箋七、八、九枚目、欠失――翻刻者註）

どうも私には巧く書けません。殊に師弟の関係にあつてもこんな不躾な点まで批評したり書いて見たりはしますまい。それを私がこんなに迄失礼を忘れて申上げるのは、此材料が非常に面白いから一層好くしたいと思ふからなのです。どうぞお許し下されますよう。実は江戸川乱歩君に見て貰ふ様に頼みましたが、若し何か間違ひが起つたりして

は面白くないと思つて今考へて居ります。

私が試みに書いて見ましたのもまだ〳〵力が足りません。少しも人に迫りません。もつと上手な人に見て貰ひたいが、上手の人は中々見て呉れません。見ても批評はして呉れますまい。悪くすると材料を横取する位が落ですから、まあ少し位まずくても自分でもつと魅力的に書き直されたら如何でしょう。

此儘で森下に推選(ママ)して見てもいゝのですが、出来得れば珠の様に磨いて見たい材料です。

兎に角終りまで拝見して後に又何かいゝ考へが浮ぶかも知れませんが、一寸此処で落手の御知らせとともに感想を申上げます。仮令口では何と云つて居つても悪く評せられると大概の人は怒りますが、どうか貴下丈けはそんな事の無い様に願ひたいと思ひます。

匆々

川田功

杉山泰道様

〈備考〉

昭和二年四月十七日、約四ヶ月間の改稿を経て「第二次草稿」が完成した後、久作は川田に原稿を送付し、再び約四ヶ月の間「狂人」稿の執筆を中断している。

昭和二年五月二日の日記に「川田氏より来書。狂人の原稿につき、批判来る」とあり、本書簡が同日到着したことが分かる。「批判」というのは、この書簡に書かれた表現法に関しての指摘を言うのであろう。「今半分迄読」んだことや、本書簡が原稿「落手の御知らせ」であることが書かれており、「狂人」稿を受け取った直後に送られたものと推測される。日記によれば、これに対して同月十七日、久作は返書を認めている。

残念ながら本書簡は、途中、便箋の七、八、九枚目が欠けている。しかし「どうも私には巧く書けません」や「私が試みに書いて見ました」と書簡中で述べられているように、欠失部分には川田によって表現を変えられ、書き直された「狂人」稿の文章が認められていたのであろう。

次に掲げる三通目の川田書簡は、久作の送った原稿を全て読んだ後に送られたものである。

③　便箋十枚

好い小説なら一生涯に只一ツ丈けでも好い書いて見たい(°)とは(、)青年小説家の多くが希望して居る所らしいです(°)貴下の此小説を旨く書けば(、)それこそ一ツ丈けでも立派なものぢやないか知らんと思はれます(°)所で余り他人から批評されると、訳が判らなくなるのは誰しも同様です(°)併し混乱の後に必ず光明を認める事が出来るものです。只才に駆られて苦みなしに書いたものは人を魅する力がないものです。私も失礼を顧ず玉稿を批評致しました上は、いゝ加減の所で止めないで深く突込んで申上げましよう。

私は二度とこんな深入りはしまいと思ひますから、今度は深入さして

戴きます。しかしこれは私一人の考へで他人から見れば全く反対であつたり大に違ふかも知れませんから、必ずこれのみをお信じならない様に願ひます。総てこれ参考に止まるのです（。）

「いよ〳〵駄目」と云ふ所まで行つても（、）此材料丈けは腐りませんと私は思ひます。それで私が不肖を顧ず深入するわけです。材料さへよければ表現を色々努力して見ればいゝのです。材料がいゝと云ふ丈けで既に半分は成功して居る訳です（。）

書くのにあせる事はいりません。ゆる〳〵気長くお書きなさい。書き直す労は厭はないに限ります（。）

論文の事に関しては第一回の様に論文を行列させると人が飽きますから、巧みに処々へ織り込めば幾つあつても差支ないと思ひます。殊に「狂人の暗黒時代」とか「胎児の夢」及「脳髄論」などはどうしても削つては駄目です。会話で平たく書くよりも寧ろ説明にして学理的な所を見せた方が可いのです。小酒井博士の恋愛曲線などでも兎の心臓をリンゲル氏液に入れて働かせると働くと云ふ事は夙に私は鍼医から聞いて居りましたが博士が勿体振つて書くと新発明かなんぞの様に世間では驚いて居ります。あれなどから比べると此三論文の方は私には耳新しく面白いのです（。）心理遺伝と云ふ事も砕けて居る内にも人を魅する様に書きたいと思ひます。それには会話体では力が弱いのです。

はし書きがあつて悪いのではなく、書き方が誠に力がなく怪奇さに魅力が無いと思ひます。先づ端書きは止めて見てご覧なさい。怪奇から怪奇へ息も継がさず人を引張つて行く様に書く事をお努め下さい。最後には総てを明瞭にして了ひたいのです。具体的にしたいものです。其代り途中には最後の解結（ママ）を見ずには居られない様に怪奇を盛つて、決して途中で想像を許さない様にする事です。

半分から先を少し拝読しましたから、少しく愚見を書かせて戴きます。先づ第一回の発作と云ふ所ですが、之れには呉一郎が如何にして発作し其経過が如何であつたかを書くべきで、突然尋問調書の様なものを突出されては少しも判りません。これは第一回にお書きになつた様に（、）呉一郎の母と云ふ人の経歴を説明的に（或は描写を交へたら猶結構です）書いた方が可いと思ひます。呉一郎が母を殺した場面丈けでも一ツの怪奇的探偵小説になり得るんですから。併し説明や描写が続き過ぎると思はれたら、中に時々会話或は答弁を挟めばいゝのです。例へば

此時若林博士が呉一郎に向つて『お前の母親と云ふ人はお前のお父親さんの名前位は話しそうなもんぢやないか』と尋ねた時（、）一郎の答へはかうであつた（。）

『私は幾度もそれを訊いて見たのです。話して呉れない程知りたい事はありませんから（。）併し其都度母は涙にかき暮れるのです。恰も私が母を苦めてゞも居る様で（、）私は無理にも訊き出す事は出来なかつたんです（。）「お前が大学を卒業して後なれば（、）そんな事にも捉はれて居ないだらうし学問の妨げにもなるまいから其時迄はお父さんの名を訊かないで下さい（。）」と母はかう云ふのが常でした（。）

私は不快と不満とを少しも減ずる事は出来ませんでしたが（、）と云つて又これ以上母を泣かせる事も出来ませんでした（。）』

と云つて居る（。）又母親と云ふ人は「偉ゐ男と云ふものはあんなに嘘を吐くものかしらん」とも云つて居つたと云ふ事である（。）斯くして呉一郎は父の名を知る事なしに、而して今では其名を語り得る人を失つて了つたのであつた（。）

————

とまあこんな風に会話を挿み込んだらい、と思ひます。

貴下が会話体を用ひられるのは其当時の模様を悉く実写して読者をして現場にある様な気持にならせようと云ふお積りの様です。

例へば第二回の発作に於て戸倉仙五郎が次の様に云つて居ります。

——え、もう（、）この様な恐ろしいことは御座いませんでした（。）其時に打ちました腰がまだ痛みまして（、）小用にも這ふて参りますくらゐで云々

とありますが聴取体に書くにしても

下男の戸倉仙五郎を調べた時（、）一郎の発作の際打つた腰が未だ痛むと云つて杖に縋り乍ら這入つて来た位であつた（。）仙五郎の云ふ所によると云々

と云ふ風にも書けますが、これは依然最初の通り物語体にした方が（、）不思議な点、怪奇な出来事を能く現はす事が出来ると思ひます。読書（者）は誰も仙五郎の答弁振を知りたいとは思つて居りません。全体の事件がどうなつて行くか呉一郎が何をするか叔母の八代がどうなるかを知りたいのです。それで第二回の発作で八代を殺した時は（、）呉一郎が叔母の家に入婿として這入り結婚式をあげた時どう云ふ風な事が起つたと（これも独立した探偵小説或は怪奇小説であり得る様に書けば尤もい、のですが）云ふ事を書くのです。これ丈けでは其当時の模様が判らないと思へば（、）其処に用ゆるのが自然描写と云ふのです。仙五郎の答弁振は知る必要はないが（、）叔母が殺された場面ははつきり知りたいのは読書（者）の要求です。だから最初にあつた様に庭の小砂をぬらす位の雨が（、）しと〱と物憂げに降つて居た（。）と云ふ様な事を書けばい、のですが貴下は自然描写を得意としないならば無理に書いて読みづらくするよりはやめた方がい、訳です。谷崎潤一郎がそうである様に事件を面白く書く人には自然描写の出来ない人がありますから。

而して書いてある事は必ず何か効果がなければなりません。出来得れば只の一字も贅字であつてはならないのです。而して始めから終まで緊張し人の好奇心を唆る様にしたのが一番い、のです。此材料ならば怪奇から怪奇が重つてぐん〱人を引摺つて行かれると思ひます（。）若林博士の言葉は丁寧過ぎ正木博士過ぎます。これは会話で性格を現はそうとした為めこうなつたのですが、一患者と大学教授との間の一般[12]形式を踏み乍ら（、）所々で両人の性癖を描いて性格を知らしめないと、読む人の方ではうるさくなります。

出来得れば一二三四巻を二巻位につめたいと思ひます。第五巻はざつと拝見しましたが、此辺は尤もよく出来て居る様に思ひますが、最後

に具体的に書くのをどうするかに就てまだ考へが出来て居りませんから、今一度拝見致します。

新青年に出て来る探偵小説は、描写と云ふ事は余りやらないで説明を多く用ひて居る様です。描写は困難であるし探偵物には説明でなければ出来難いのでしょう。併し西洋物には巧みな描写が随分ある様です。此貴下の小説は出来得れば客観描写を多く用ひたいと思ひます。

「読者！」など、呼びかけたりするのは旧式も最大旧式な説明ですから（ママ）心理描写と感覚描写と（自然描写も少し位あれば更にいゝのですが）の間を説明で結んで行けば、只に探偵小説の通俗ものとしてゞはなく立派な芸術品に成り得るのです。

此小説は又「私」と云ふ一人称の書き方ですから（、）「彼」と云ふ（ママ）一人称よりは書き易いのですから、成る丈け描写を用ゆるに努めて下さい。恐ろしいと云ふ時にも恐ろしかつたと説明せず、背中を毒蛇が這つた様で躯中が一度にぶる〳〵と震へた（。）と云ふ風に描写した方が読書（者）に恐ろしかつた光景を想像させる事が出来るのです。而して正木博士が「私」に話するのには話を長く続けて「私」が余り口を出さない様に（、）話の切れ目へ来ても「私」は凝乎考へ込んで居る時を多くして喋らせない様にしないと、折柄（ママ）の論文のいゝ所はすぐ人から忘れられ滅茶々々になります。「私」と云ふ人が感心して聞いて居ないと、読書（者）は感心する事が出来ません。

私は未だ一ツも可い芸術品を創作して居りません。それで理窟許り申上げては誠に相済みませんが、芸術中小説とは如何に書くべきかの研究は相当して居る積りです。

只材料がなくて困つて居るのですから、貴下の材料に惚込んで差し出がましい事を申上げる次第です。

今日小説の批評は随分発表されて居りますが、私が玉稿に対して試みた様な具体的批評は決してありません。こんなに書くと教へて居る様で失礼になるからでしょう。併し私はお教へして居るとは思つて居りません。人のを批評する位なら此位まで具体的に突込んで批評するのが至当であり、漠然たる事を云つて居る人は具体的の批評が出来ないんだと思つて居ります。私は今後決して他人の批評は致しません。只此玉稿に対してのみ許して下さい。これが始めての終ですから。

第五巻の所で一寸気が付きましたが

……（此点線は少し濫用されて居る様です（。）此処でもこんなものは不必要と思ひます）けれども……けれども……この私は（、）何の因縁で此様な鬥ひの中に捲き込まれたのであらう……（。）何様な来歴で（、）呉青秀の呪ひの中に引込まれたのであらう（。）こればかりはいくら考へてもわからない……

此文章なども少しなまぬるく皆不必要の様に思ひますが、わけて「こればかりはいくら考へてもわからない」と云ふ字はいりますまい。事件が怪奇に富んで居る丈けに、文章を引締めて書くのが非常に必要な事と思ひます。今少し要点を拝見したいと思ひますから暫く御預り致します。

匆々

川田功

杉山泰道様

〈備考〉

久作から原稿を受け取った直後に書かれた二通目の書簡より、更に詳しく「狂人」稿について助言を行っている。大部分が表現法――客観描写を推奨する意見であるが、その指摘が「狂人」稿に生かされたかといえば、肯んずる事はできない。昭和十年刊の『ドグラ・マグラ』においても、また他の作品においても、饒舌な一人称体は久作の語りの特徴と言うべきものになっている。西原氏前掲「解題」でも、書簡に見られる川田の技術批評や原稿の構成に関する助言がどれほど有効であったか、即断はためらわれるとされている。

ただしかし、これらの書簡を見るに、川田の助言が原稿にどう影響したかという問題より、もっと興味深いことが見出される。書簡は、川田に送られた原稿の様子、つまりその時点での「狂人の解放治療」の構成が如何なるものであったかを知る手がかりとなる。このことに関しては補説において述べたいと思う。

本書簡は、②書簡より後、ただし、それを去ること遠からざる（「半分から先を少し拝読しました」）時期に認められたものである。本書簡の末尾に「暫く御預り致します」とあるように、この書簡が久作に送られた際にはまだ原稿の返却はなかった。その後、日付は不明だが、原稿が返送され、昭和二年八月十日、三度目の執筆期に入ったことが日記から分かる。同月十二日には「今度は全然興味中心にする積り」との記述があり、気持も新たに推敲を開始したものと思われる。そこからまた昭和三年三月二十七日の「狂人の原稿一段落」という一応の決着を迎えるまで、約七ヶ月半の間、続けて執筆され「第三次草稿」が物されたのである。

④　便箋五枚

其後久しく御無沙汰致しまして何とも申訳が御座いません。人間はなまけ出すと何処までなまけるものだか判りません。近来は原稿を書いても載せて呉れる処はないし探偵小説も思ひ浮ばないしと云つた風で、子供相手に遊ぶのが忙がしく筆を執る事が至極億劫になりまして、日々二三手帋を書く必要を感じ乍らどうしても書けませんでした。「探偵趣味」でいなかの話を拝見しました時ひどく啓服しましたから、一ツ其旨を書いて御無沙汰の御詫びにと考へつゝ、またまたなまけて了ひました。第二回目のいなかのお話などもつと引延したら一ツ々々が探偵小説として立派に成立ちそうで惜しい様な気がしますねえ。勿論あのまゝでも多くの人を呻らせた事は確かですが。

それから御送り物を頂戴して居乍ら碌々御礼も申上げず只其侭ぼんやりして居りますが、只恐縮致しどうしてよいのか判らずに居る次第です。先日一寸三越へ参りましたから、東京の土産と云へば浅草海苔かなと云つた具合の思ひつきでほんの少々お送り致しましたが、近来の海苔は朝鮮から来ると云ふ話をききますと、それぢや少しも珍[13]らしくなかつた訳だと失笑を禁じ得ません。何か東京に御入用なものがあり

ましたら御申付け下さいまし。先は余りの御無沙汰の御詫びまで。

匆々

川田功

杉山泰道様

猶益々御健筆ならん事を祈上ます。

〈備考〉

四、五通目の川田書簡には、「狂人」稿に関することは書かれていないが、夢野久作関連資料として紹介を行っておく。

昭和二年十二月二十四日付の日記には、「川田氏より海苔を貰ふ」とあるので、この書簡は久作が川田に海苔の礼状を書き、それに対する返信であろうか。書簡中に登場する「第二回目のいなかのお話」は、『探偵趣味』昭和二年十二月号（第三巻二十六号）に掲載された「ゐなか・の・じけん」続編のことである。なお『探偵趣味』は大正十四年九月創刊、昭和三年九月に廃刊された。

⑤　便箋四枚

其後は意外の御無沙汰致居候処、いつとはなしに春と相成、益々御青祥の段奉慶賀候。小生二月の初旬、友人の立候補後援の為長崎に参り候間、帰途には福岡にも立寄り知人を訪問致さんと存居候処、不慣[14]なる演説の為音声を失し、其際恰度風邪に罹り候間、全く唖と相成候間、一切を思ひ止まり、帰京致候。然るに咽喉一向に治らず、今日も未だ満足に話が出来ぬ有様に候。其上に何となく俗事頻発致候し、殆んど机に向ふ暇無之、日々心に掛り乍ら遂々御無沙汰致し申訳無之候。又先日は見事なる鯛の粕漬御投恵に預り、早速舌鼓を打ちて賞味致しながら御礼の方は一向にそちのけに致し、我儘勝手の段、何とも申訳無之候。本日は一寸落着きたる気分に相成候間、乍後一筆御礼申述度如此御座候。猶益々御壮健の程祈上候。

敬具

四月四日

川田功

杉山泰道様

几下

〈備考〉

「四月四日」と書簡に記されているが、発信年は不明である。

ところで、「狂人」稿に関する三通の書簡以後、久作と川田の関係はどうであったのだろうか。③書簡以降、川田からの原稿返送の際にも何等かの書簡が送られたであろうことは推察できるが、不明である。④⑤の二通は挨拶がてらの近況報告程度のものであり、長らく連絡を取っていないことは文面からうかがわれる。③の書簡後、川田と久作は疎遠になったのであろうか。それはともかくとして、原稿を最初に送付した際、川田から丁寧な書簡をもらったことは、全くの新人であった久作にとって、執筆への励みとなるものであっただろう。

補説　「狂人の解放治療」の構成について

1　「はしがき」に関して

出版された『ドグラ・マグラ』の本文と草稿段階の「狂人の解放治療」には大きな相違点があった。それは「はしがき」の有無である。[15]「はしがき」は『ドグラ・マグラ』の草稿段階で試行された形態であり、最終的には破棄されたためその存在が知られることはなかったが、杉山文庫に草稿が残されており、西原和海氏によって初めて紹介された。[16]「はしがき」は精神病院の中に幽閉されている「私」が、外の世界に病院の内情を伝えるため、「此の奇妙なモノガタリ」を「十八冊のノートブック」に書いたと述べるところから始まっており、あとに続くと思われる本文の内容を解説する役割を持つ。この「はしがき」が草稿のどの段階で書かれ、いつ破棄されたのかは不明であったが、③書簡に「先づ端書きは止めて見てご覧なさい」というように、「はしがき」に関する助言が見られることが、この問題を解く鍵となる。この助言は、川田に送付された「第二次草稿」に「はしがき」が存在していたことを証している。[17]また、日記においても「第二次草稿」を執筆した期間中、昭和二年一月十四日に「狂人の原稿を書く。最初を往来の御方様といふ文句にきめ、最後を大学の参考書といふことにする」という、「はしがき」の冒頭を含む記述が見られる。現存する「はしがき」は確かに「お通りかかりの御方様」という「私」の呼びかけから始まり、西原氏が前掲「解題」で指摘するように、この「往来の御方様」という文句に対応するのである。

2　五巻構成

「第二次草稿」執筆期間中、昭和二年二月三日の日記に「狂人の原稿、第五巻に入る」と書かれている。③書簡に見られる「一二三四巻を二巻位に」「第五巻は」云々という記述によっても、確かに昭和二年の時点では、五巻形態が取られていたことが分かる。ここで思い起こされるのは、昭和十年刊の『ドグラ・マグラ』において語り手「私」が、正木博士の居室の硝子戸の内に発見する、作中作『ドグラ・マグラ』である。表題と同名の原稿が作中に出現するという入れ子構造が取られているのだが、入院患者が書いたという『ドグラ・マグラ』と題された原稿は、「全部で五冊に別れていて、その第一頁ごとに赤インキの一頁大の亜剌比亜数字で、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴと番号が打ってある」（八十四頁）[18]ものであり、昭和二年時点での原稿の状態と重なり合う。小説全体を五巻構成にするという構想はなくなったが、作中に登場する原稿にその形態は引き継がれたのである。

3　「論文」という形式

③書簡中「論文の事に関しては第一回の様に論文を行列させると人が飽きますから巧みに処々へ織り込めば幾つあつても差支ないと思ひます。殊に「狂人の暗黒時代」とか「胎児の夢」及「脳髄論」などはどうしても削つては駄目です」と書かれている。「第一回」をどう解釈するかによるが、書簡中に見られる「第一回の発作」「第二回の発作」は作中の発作の回数表示として、この「第一回」とは森下に送付した

大正十五年八月時点の原稿、「第一次草稿」を示すものと思われる。「第一次草稿」を執筆した大正十五年五月十一日から八月二十一日にかけての日記は、ほぼ「原稿書き」という記述のみであり、詳しい原稿の内容には触れず、その構成がどのようなものかは全く不明であった。松本氏は前掲論文において「第二次草稿」執筆期間中に「組み直し」や「置きか」えるという単語が日記に見られることから「置きか」え可能な「ノート単位の各構成物」が「相応の独立性を持つ必要がある」と推測したのだが、確かに、ここに見られる通り「狂人」稿の初期段階、「第一次草稿」の時点においても、独立した「論文」形式のものが、「行列」と言うからには三つ以上連続していたのである。また、「第一次草稿」に対する返信である①書簡にも、「作中の正木博士が外国で博士論文として書いたもの」という記述があった。

「論文」を作中に挿入するというこの形式は、刊行されたテクストにおいてもその特徴をなしている。すなわち、昭和十年刊『ドグラ・マグラ』でも、精神病棟の一室で目覚めた「私」の語りを物語の枠とし、中間に大部の原稿が挟まれる。中間の原稿というのは「キチガイ地獄外道祭文――一名、狂人の暗黒時代」、「地球表面は狂人の一大解放治療場」、「絶対探偵小説　脳髄は物を考える処に非ず＝正木博士の学位論文内容＝」、「胎児の夢」、「空前絶後の遺言書　大正十五年十月十九日夜――キチガイ博士手記」という五種の「書かれたもの」であり、その一篇一篇は表題を持つ独立した論文や新聞記事の切り抜き、遺言書などである。そして③書簡に挙げられた「狂人の暗黒時代」は「キチガイ地獄外道祭文」、「脳髄論」は「絶対探偵小説　脳髄は物を考える処に非ず」に対応している。

川田の挙げた三論文は、特に何度も手を加えられ改稿されている。川田書簡①②の間、つまり大正十五年十二月二十二日から昭和二年四月十七日の「第二次草稿」執筆期の約四ヶ月の間の日記にも、これらに関係する記述が見られ、昭和二年一月三日には「終日物を書きて終る。狂人の解放治療中、脳髄は物を考える処に非ずといふ議論を書くに、六ケしき事限り無し。それを平易に短かく、面白く書くは容易の業に非ず」とあり、「脳髄論」執筆の困難さが吐露されている。また昭和二年一月二十八日には「胎児の夢の論文のうち、夢の解説を書き直し、非常に疲れたり」とあり、「胎児の夢」も二度目の書き直しを行っている。この「胎児の夢」に関しては更に昭和四年八月五日から九日にかけても、書き直しがなされている。

三論文のうちの一つ「外道祭文」に関しても、③書簡が送られた後、つまり第三次草稿の時点で再び書かれていることが日記から分かる。昭和二年九月六日「終日、狂人原稿書き。（中略）◇外道祭文キチガヒ地獄」とあり、八日には「外道祭文、かきおはる」と、三日間で書上げている。しかし再び昭和二年九月十三日「午后、外道祭文下書き」と書かれており、翌日には「狂人地獄を書きあげる」、九月十五日「狂人地獄おはり。先へ進む」とあり、短期間のうちに二度書き直された。

さて、昭和四年九月十三日には「狂人」稿が「大部片付」き、二十日には「狂人原稿終り、油紙に包む」という記述が見られ、一旦ここ

で原稿は完成しているようである。しかし最後にまた「脳髄論」を書き直している。昭和四年十二月十三日「脳髄論の下書きをかく」とあり二十七日まで「脳髄論」の書き直しを試みている。少なくとも「胎児の夢」と「脳髄論」は三度書き直されたことが日記から分かる。「脳髄論」に関しては翌年も引続き手を入れ、一月五日に完成を向えている。そしてその翌日、漸く「狂人稿一千枚」の校正が全て終り、一月十一日「狂人」稿の題名を「ドグラマグラと改め」、博文館の水谷準のもとへ「送り出」すこととなった。

以上、駆け足になったが、これら三論文は初期段階から構想され、このように書き直しや改稿を集中して行われてきた。久作が力を入れていたことは明らかであり、これらが小説の根幹となる「思想」とでも言うべき意味を持っていたと推測されるのである。

紙幅の都合により、書簡の詳細な分析は他稿に譲りたいと思うが、川田書簡と久作の日記を見ることによって、朧げながらも『ドグラ・マグラ』執筆初期段階の構成が見えてくるであろう。すなわち「第二次草稿」の段階で、五巻構成が取られていたこと、また「はしがき」が少なくとも「第二次草稿」の時点まで試行されていたこと、そして「第一次草稿」の時点から独立した「論文」が存在していたことが判明するのである。

■付記

翻刻掲載を御了解下さいました杉山満丸氏に篤く御礼申し上げます。なお、川田功氏の御遺族の連絡先がわかりません。御存じの方は御教示下さいますよう御願い申し上げます。

末筆ながら、資料収集に際し、種々御協力賜りました福岡県立図書館郷土資料室の方々に篤く御礼申し上げます。

■註

(1) 明治四十三、四十四年、大正元年、大正十三年（三月まで）、大正十五年、昭和二～五年、昭和十年の日記が現存する。これらは全て、杉山龍丸編『夢野久作の日記』（葦書房、一九七六年九月）に翻刻されている。

(2) 森下は『新青年』創刊の大正九年一月から昭和二年四月まで編集長を務め、同年より『文藝倶楽部』の主筆となり、博文館を立て直すため編集局長となったが、昭和六年十一月退社している。

(3) 大正十三年にも、杉山泰道の本名で「侏儒」を博文館懸賞小説に応募し、同年十月の『新青年』に選外佳作が報じられている。しかし「侏儒」は同誌には掲載されず、翌年の十月から大正十五年二月まで『黒白』で連載された。

(4) 『ドグラ・マグラ』の起稿が何時であったかというのは大きな謎であるが、これに関しては後出西原和海、松本常彦両氏の論考を参照のこと。

(5) 昭和五年一月十一日の日記に「狂人原稿をドグラマグラと改め」とある。

(6) 「徳蔵」とは、久作の妻クラの叔母が再婚した杉山清十郎の養子であり、久作の妹多美子の夫、石井俊次の従弟にあたる。クラの義従弟（『夢野久作の日記』、杉山龍丸の註解による）。

(7) 松本常彦「『ドグラ・マグラ』ノート」(『敍説Ⅱ』三号、二〇〇二年一月)。氏は日記から『ドグラ・マグラ』に関する記述を抜き出し分析することによって、原稿が書き継がれて行く様を詳細に追った。

(8) 西原和海編『夢野久作の世界』(平河出版、一九七五年。沖積舎、一九九一年)所収。

(9) 西原和海「解題」では川田心子編『川田功追悼録』(私家版、昭和六年)となっているが、心子は大正十年生まれの川田の娘であり、発行が昭和六年であれば、年齢的に見て編者とは考えがたいだろう。

(10) 前掲、森下雨村「博文館時代」。

(11) 杉山文庫所蔵書簡に関しては拙稿「夢野久作宛、佐左木俊郎書簡」(『岡大国文論稿』第三十三号、二〇〇五年三月)を参照のこと。

(12) 難読につき、原体を示す。

(13) 同前。

(14) 同前。

(15) この有無によって小説の構造が大きく変化することは、拙稿「『ドグラ・マグラ』考・草稿と決定稿における発信/受信の構造」(『岡大国文論稿』第三十二号、二〇〇四年三月)において述べた。

(16) 西原和海「夢野久作の生涯　久作十一の謎」(『ユリイカ』一九八九年一月)。杉山文庫に五種現存する「はしがき」の内の一種は、その後西原和海編『夢野久作著作集』第六巻(二〇〇一年七月)に翻刻された。

(17) 第一次草稿の時点で「はしがき」が存在したかどうかに関しては、資料がないため判断を保留したい。

(18) テキストはちくま文庫版『夢野久作全集』第九巻(一九九二年四月)を使用した。